《論　文》

「塔の結社」論序説—ゲーテと「秘儀結社」

田　村　一　郎

はじめに

札幌学院大学の人文学部人間科学科が，発足して20年になるという。早いものでこの大学を離れてもう10年以上になるが，「人間科学」は人間にかかわる諸学の総称なのかそれとも独自の学問領域なのかなどと，夢中で議論したことが思い出される。いっそうの発展を願い，まだまだ試論の域を出ないがゲーテと「秘儀結社」について書かせて頂くことにする。

はじめに，なぜこのようなテーマが「人間科学」とは言わないまでも，少なくとも「人間研究」の基本にかかわるのかを述べておこう。「学問」と「人間研究」の関連を考える上で大きな示唆を与えてくれるのは，カントとスミスである。周知のとおりカントはみずからの思索の課題を，「私は何を知り得るか」「私は何をなすべきか」「私は何を望み得るか」の３つにまとめたが，それらを貫く基本テーマを「人間とは何か」に求めている。[1)]

他方スミスは，当時のイギリスの慣例に従ってみずからの専門領域を Moral Philosophy と呼び，この領域を自然神学・倫理学・法学・経済学から成るとしている。その中心に置かれているのは，もちろん『道徳感情論』を柱とする倫理学である。このことは，法学と経済学が「応用倫理学」と呼ばれていることからも明らかだろう。いわばスミスを資本主義経済論の始祖の一人にしている『国富論』は，倫理学的視点からの人間活動の検討の副産物だったのである。こうした意味での Moral Philosophy は，Natural Philosophy に対置されている。[2)] したがって，「道徳哲学」と訳したのでは不十分である。

その際参考になるのは，フランス語の moraliste という言葉である。この語はモンテーニュ以来の伝統をふまえてそのまま「モラリスト」あるいは「人間性の探究者」と訳されるのがふつうである。身の回りのすべての事柄を，「人間性」の現れとして理解し考えてゆくのが「モラリスト」なのである。このような意味でMoral Philosophyは，「人間性の探究学」とでも訳せばスミスの意図に適うのではなかろうか。かつて隅谷三喜男氏が統計や数的処理が支配する経済学の現状を嘆いて，スミスの基本視点を思い起こすことの大事さを指摘されたのも，こうした理解に立っての

ことである。[3)]

こうしたカントやスミスの例からしても，「人間科学」なり「人間研究」が何よりもめざさなければならないのは「人間とは何か」「人間性とは何か」という問いである。その一環として私はここ10年ほど，ドイツ観念論ことにカントとフィヒテを中心に，18世紀後半から19世紀前半のドイツ思想とフリーメースンリィなどの「秘儀結社」の関連を検討してきた。それらをふまえながら，一つの「人間研究」として考察を進めてみたい。

一.「イニシエーション」劇としての「ヴィルヘルム・マイスター」

「ヴィルヘルム・マイスター」を主人公とする『徒弟時代』(1795) と『遍歴時代』(1829) の連作は，もっとも秀れた教養小説の一つとされてきた。演劇をめざしたヴィルヘルムが，さまざまな経験を重ねながら豊かな人間として成長してゆく過程を，時代背景をもふまえながら丹念に描き切っているからである。ことに『遍歴時代』での，産業革命による機械化の農村への浸透とその変質への鋭い眼は，ペスタロッツィの『リーンハルトとゲルトルート』(1781～87) を思い起させる。

両著を通して注目されるのは，こうしたヴィルヘルムの成長を促すのが「塔の結社」という「秘儀結社」(以下「フリーメースンリィ」などの，みずから定めた「秘儀」の追求をめざす「秘密結社」をこう呼ぶことにする) とされている点である。ヴィルヘルムはそのことに気づかないが，「徒弟時代」の彼を陰に陽に導いてきたのは，彼の能力に期待した司祭 (アベ) やヤルノーをはじめとする「塔の力」だったのである。そのことは第7巻第9章の「結社」への参入式を通じて明らかになるが，ここでこの「教養小説」は一つの「イニシエーション (通過儀礼)」劇となる。

「イニシエーション」というとすぐ思い出されるのは，モーツァルトの『魔笛』である。その台本を書いたシカネーダもそうだが，モーツァルトは数多くの「フリーメースンリィ讃歌」などからも知られるとおり，この組織の一員だった。いわば『魔笛』は，主人公タミーノが試練を乗り越えて「フリーメースンリィ」に迎えられるまでを描いた「通過儀礼」劇だったのである。[5)]

ヴィルヘルムを見守る「塔の結社」も「フリーメースンリィ」に想を得たものであることは，両著の表題とヴィルヘルムの姓からもうかがえる。もともと「フリーメースンリィ」という結社は，教会や城などの大建築にたずさわる「石工 (メースン)」のギルドに由来する。したがってその「位階」は，時代が進むにつれて複雑化してはくるが，もともとは「徒弟・職人・親方」の3つが基本だった。「徒弟 (Lehrling)」は「徒弟時代あるいは修業時代 (Lehrling)」を終え一人前と認められ「職人 (Geselle あるいは Gehilfe)」になると，さらに技量を磨くため旅に出る。それが「遍歴 (Wandern)」あるいは「遍歴時代 (Wanderjahre)」であり，こうしてさらに修業を重ねてゆく「職人」は Wanderbursche とも呼ばれた。そうした厳しい修練を経てギルドに迎えられて初めて「職人」は「親方 (Meister)」となる。ヴィルヘルムの姓の「マイスター」とは，この「親

方」を意味する。まさにヴィルヘルムはその姓からしても，初めから「秘儀結社」の幹部たるべく性格づけられていたのである。

ではなぜゲーテは，『ファウスト』と並んで最晩年まで思いをめぐらした「ヴィルヘルム・マイスター」を「塔の結社」を軸に展開したのだろう。しかも注意しなければならないのは，この「結社」の性格なり役割が『徒弟時代』と『遍歴時代』ではかなり異なったものになっていることである。前者ではそれはまさに「フリーメースンリィ」と同じく，「修業」と「遍歴」を通して，階級や民族・宗教などに縛られない自由で豊かな人間性の育成がめざされている。しかし後者ではこの組織が活動の中心に据えるのは，いかにして産業革命による急激な社会の変質に対応するかであり，その一つの解答を新世界アメリカへの「移住」なり「移民」に求めるという方向である。何が，70才を越えたゲーテにこうした転換を強いたのだろう。以下これまで見ることのできた研究を中心に，ゲーテにとっての「塔の結社」の意味を追ってみよう。

二　ゲーテと「秘儀結社」

1．ゲーテの「秘儀結社」とのかかわり

『国際フリーメースン事典』(以下IFLと略称)には，4ページ以上にわたるゲーテについての記述がある。[6] それによると，ゲーテがこのような「結社」と接するようになったのは，15才の頃の「フィランドリアのアルカディア結社 (Arkadische Gesellschaft zu Phylandria)」が最初のようである。この「結社」は1759年に羊飼いの組織として作られたが，ブリのルートヴィッヒ・イーゼンブルクによってフリーメースンリィ的なものに改められた。他のフリーメースン・ロッジと異なり，貴族にかぎってのことだが女性も受け入れるなど，若者に人気があったようである。ゲーテはこの主宰者と知り合い，1764年に2通の手紙を書いて入会を申し込んでいるが，認められなかった。ゲーテと同じ時期に申し込んだ同じ年令のヘッセンのルートヴィッヒ皇子は喜んで迎え入れられたというから，身分が重視されたのだろう。

IFLによるとゲーテは，1772年に法律研修生として4ヶ月ほどを過ごしたヴェッラーで，「ロッジ風の結社」の「騎士の食卓」とか「移行の位」などの位階を得たことになっている。しかし『詩と真実』第3部第12章の叙述によると「騎士の食卓」とはロッジ内の位というよりは，公使館の関係者や研修生を「騎士団」に模した懇親グループのことである。[7] ヴェッラーはコブレンツからライン支流のラーン川を遡った所にある小さな町だが，当時「帝国法院」が置かれていた。「帝国法院」とは神聖ローマ帝国を形作っていた諸邦間の係争を調停するための機関で，ミニ国際司法裁判所のような性格を持っていた。あまり機能はしていなかったようだが，一応諸邦が公使館を置き職員を派遣していた。「公使館の関係者」とは，こうした人々のことである。[8] 弁護士をめざしていたゲーテもその地で，少なくとも「帝国」全体に通用する法感覚を身に付けようとしたらしい。もっともゲーテがそこで学んだ最大の成果は，『ヴェルテル』のロッテのモデルとなるシャルロッテ・ブッフへの憧れだったのだが。

ここでいう「騎士団」とはもちろん，十字軍の頃聖地や巡礼保護のために結成された「宗教騎士団」の一つで，後に東プロイセン周辺の布教・開拓に従事した「ドイツ騎士団」のことだろう。[9] ちなみに「騎士の食卓」とは，「フリーメースンリィ」の起源をエティモロギッシュに解明しようとしたレッシングが，『エルンストとファルク』の最後の部分で mason の語源として引き合いに出した机・食卓という意味の masony，Mase と関連すると思われる。レッシングは，その組織に集う人々を「円卓の騎士」とも呼んでいるからである。[10] そのためだろうヴェッラーのこの「騎士団」は，「ロッジ風の結社」という性格も持っていた。その位階が，「過程」「過程の過程」「過程に対する過程の過程」「過程の過程に対する過程の過程」という４つである。このやや奇妙な位階の持つ意味を理解するのがメンバーの義務とされていたが，ゲーテ自身はこれを「何の目的ともつながらない」一種の「暇つぶし」に類するものと理解していたようである。

ゲーテがフリーメースンリィを知ったのは，「骨相学」で有名なヨハン・カスパール・ラファターの１つ年上の兄ディーテルムを通してのようである。[11] ライプツィッヒ遊学中の1773年頃のことだが，この時はロッジには入っていない。1775年４月頃にもゲーテは，婚約者リリーの紹介でより有利な職を求めてこの組織と接触を持ちかけたらしい。しかし結局は「自尊心」が許さず断り，秋には婚約も破棄し暮れにはヴァイマルに向かうことになるが，フランクフルトでのフリーメースンリィの影響力の一端を垣間見ることができよう。[12]

ゲーテが正規にフリーメースンとなったのは，同じ年の暮れにヴァイマルに移ってから５年後の1780年６月のことである。その「アマリア・ロッジ」は1764年創設のドイツ圏では比較的古いロッジであり，ゲーテは翌年６月には「職人」に昇格，82年３月には「マイスター」の位を得ている。しかしそれからまもなく「アマリア・ロッジ」は閉鎖され，1808年再開されるまで活動を停止する。その直前にヴィルヘルムスバート大会において，1772年以降ドイツの「フリーメースンリィ」を牛耳ってきたフントらの「厳しい掟（Strikte Observanz)」の支配が崩れている。[13] おそらく，その紛争に巻き込まれてのことだったのだろう。そうした空白もあってか，同じ頃王のカール・アウグストはヘルダーらとともに，ヴァイスハウプトが創設しクニッゲが発展させつつあった「イルミナート結社」に参加し，ゲーテも同調している。

カール・アウグストは，ゲーテは「結社」の「教義」などの理解にはあまり熱心でなかったと嘆いていたという。確かにゲーテがこれらの「結社」に加わったのは，内的必然性に駆られてというよりは，周囲の人間のほとんどが参加しているという実情に合わせたという面が強かったようである。「アマリア・ロッジ」の申込みの手紙には，きわめて直截に次のように書かれている。「..... 私はもう長いこと，いくつかの動機から一緒にフリーメースンの結社に入れたらと望んで来ました。この要望は，このたびの旅行でいっそう強まりました。私が評価することを学んだ人々とより深く交わる上で，私に欠けているのはこの肩書だけです。私を加入へと駆り立てるのは，この人との交わりを重んずる感情だけです。..... 」。[14] ゲーテが貴族の位を求めたのは，王女とトランプをするためにそれが必要だったからという逸話が思い出されるが，さまざまな形の身

分差別はメースンの一員であるかどうかにも及んでいたのだろう。

しかしほぼ2年近くを経た「マイスター」の位階要望の書類では,「私を本質的なものにより近づけてくれるなら,もっと進んでみたい」とか,「同志のためというより,私自身のためにそのことを望みたい」というような文章が見受けられる。もちろん外交辞令的な面もあるのだろうが,この「結社」のそれなりの意味をつかんできていたともみることができよう。いずれにしても「厳しい掟」の崩壊後に見られたような,入り乱れてのフリーメースンリィ界の混乱はゲーテには我慢のならないものだった。従ってカール・アウグストから依頼された「アマリア・ロッジ」の再建準備は引き受けはしたが,その指導原理は,この組織を本来の純粋な形式に戻そうとしていたハンブルクのシュレーダーの体系に求めている。晩年にそのシュレーダーに協力・助言したのがヴァイマルの宗教界をリードしていたヘルダーであるから,ゲーテもヘルダーと同じく「理想としてのフリーメースンリィ」を追い求めていた人の一人だったと見てよかろう。

晩年のゲーテの「フリーメースンリィ」への深いかかわりを示すものとして,1815年に息子のアウグストがこの「結社」に受け入れられた時などに作られたいわゆる「ロッジ連詩」や,柩を前にしての1813年の「ヴィーラントへの同志としての思い出」などがある。[15] ヴィーラントは再開の翌年の1809年に「アマリア・ロッジ」に加入しており,それに積極的に協力したのが他ならないゲーテだった。しかしIFLも認めているとおり,ゲーテは一般的な意味では「よいフリーメースン」とは言えなかったようである。IFLは,「かつてロッジで前掛けを掛けていたもっとも偉大なドイツ人」[16] という,やや苦しい賛辞でその項を閉じている。ゲーテはそこに書かれているように,たんにこの組織に打ち込むだけの十分な時間がなかったからというだけではなく,その内情もふくめて「フリーメースンリィ」の限界を厳しく見据えていたのだろう。それがゲーテを『遍歴時代』に見られるような,「塔の結社」の新たな方向づけへと導いたとも考えられるのである。もう少し,「秘儀結社の時代」とも言われるその当時の実情にふれておこう。

2.「秘儀結社の時代」の実情

ゲーテ自身,「当時は秘儀結社の時代だった」と述べている。[17] この時代の「秘儀結社」の実情を知る上で役立つのは,カントとフィヒテのそれらとのかかわりである。紙数が足りないのでその詳細は拙著『十八世紀ドイツ思想と「秘儀結社」』に譲るとして,ゲーテと関連することだけでも紹介しておこう。カントがいわゆる「批判哲学」を展開したのは,ゲーテがほぼ3,40才の80年代から90年代前半にかけてであるが,とうぜんその波紋はドイツ圏全体に及んでいる。ゲーテも限定は付けながらも,その「理性批判」の意味を高く評価している。[18] 他方フィヒテは1761年生まれで,逆にゲーテなどの影響の下で育った世代である。1794年には,そのゲーテの推奨でイエナ大学に迎えられている。もっともイエナ時代はわずか5年ほどで,いわゆる「無神論論争」で1799年にはベルリンに去っている。

この頃のドイツでの「秘儀結社」の状況を知る上で役立つ,カントとその教え子との往復書簡

がある。カントが学生時代に金の工面までしてやったプレッシングという人で，後にドゥイスブルクの哲学教授になっている。なお，このプレッシングはゲーテともかかわりがある。「ヴェルテル」病は本の発刊直後よりしばらく経ってから強まったようで，この人は76年に『ヴェルテル』に感動してゲーテに２度にわたって「手記」を送っている。ゲーテもそれに打たれてわざわざ名を隠して会いに行き，語らいの一夜を過ごしている。それがかなり印象深いものだったことは，16年もたった1792年にドゥイスブルクを通りかかったゲーテが会いたい人としてプレッシングの名をあげ，その頃の「センチメンタルでロマンティックな関係」を懐かしんでいることからもうかがうことができる。[19)]

それはともかくプレッシングは1783年秋の手紙で，カントにまもなく「狂信と無知の悲しい時代」がやってくると警告している。さらに翌年の３月にはカントの返事に答えて，それを導くものとして「フリーメースンリィ」「ジェスイット」「シュレプファーの昔の仲間」「プロテスタント結社」の４つをあげている。[20)]「ジェスイット教団」あるいは「イエズス会」は，この当時は積年のおごりのため，1773年から1814年まで法王によって活動を禁止されている。しかし「目的のためには手段を選ばない」のをモットーとするその一部の連中は，さまざまな「結社」に浸透して活動を続けていたようである。ヴァイスハウプトやヴェルナーさらにはヤコービまでが「隠れジェスイット」と目されたのは，そうした暗躍が随所に見られたからだろう。次の「シュレプファー」とは当時の有名な神秘思想を利用したサギ師で，その「昔の仲間」とはフリードリッヒ大王の死後プロイセンの宮廷に刺さり込んだヴェルナーとビショップヴェルダーのことである。彼らはいずれも，「バラ十字団」の流れを汲む「黄金バラ十字団」のリーダーである。「プロテスタント結社」はそう大きなものではなかったようだが，ウルルシュペルガーが主導するものなどはプレッシングの故郷のヴェルゲニローデなどでも活躍していたようである。

プレッシングはあげていないが，当時はまだ「イルミナート結社」も力を持っている。したがってフリーメースンリィ，イルミナート結社，黄金バラ十字団，ジェスイット，プロテスタント系結社の５つが，18世紀末のドイツで影響力を持っていた「秘儀結社」とみてよかろう。この頃はまさに「秘儀結社の時代」の名にふさわしく，こうした「結社」がさまざまな形でせめぎ合っていた時代だったのである。

これらのうちでもっとも大きな力を奮っていたのは，いうまでもなく「フリーメースンリィ」である。カントの時代のケーニヒスベルクでは知識人を始め有名人のほとんどがこの組織に属していた。カントはハーマンと同じく，当時では珍しく生涯「秘儀結社」とかかわわりを持とうとしなかった一人だった。フリードリッヒ大王自身が皇子時代の1739年にフリーメースンとなり，即位直後にはみずからベルリンにロッジを開設していることからも判るとおり，この時代のドイツの「フリーメースンリィ」は王族をも巻き込んだ社交クラブ的性格が強かった。とくに商業活動の盛んだったケーニヒスベルクなどでは，仕事をスムーズに進めるための潤滑油的な役割も担っていたようである。カント自身は「一般歴史考」や「永久平和論」に見られる「世界公民」

的立場や，道徳的完成を人間の究極目標とする主張からしても，この「結社」と思想的にはそう隔たっていたわけではない。それでも自身が加わらなかったのは，その神秘めかしながら世俗的でもある結社の強制によって，生活や思索のリズムを崩されるのを嫌ったからだろう。しかしそうしたカントでも，周りのほとんどが「フリーメースン」であるような時代に生きるかぎり，それらとのかかわりなしに過ごすことはできず，『ベルリン月報』などにいくつかの関連する時評論文を残している。

たとえば「思考の方位を定めるとは」という論文があるが，これはいわゆるレッシングの信仰をめぐる「スピノザ論争」に関連してヤコービを批判したものである。当時のドイツ圏のロッジでは，合理的傾向と神秘的傾向との対立が強まっていた。『ベルリン月報』の主宰者であるビースターは前者に属し，ヤコービやその盟友シュロッサーは後者の代表的論客ということになる。ということはいずれにも属していなかったとはいえ，カントもみずからの文化批判なり時代批判を語る際に，何らかの選択を迫られざるを得なかったということである。カントは晩年に至るまで『ベルリン月報』を発表の場としていたことからも明らかなとおり，少なくともビースターの方に近い立場に立っていた。フリーメースンリィの対立などには何の興味もなかったカントも，それを基盤とした哲学の「神秘化」や「情緒化」を許すことはできなかったからである。ヤコービ批判もそうした意図の表われであり，さらにことにシュロッサーを対象として「哲学で最近高まっているよい気なもの言いについて」（1796）や「哲学における永久平和条約の間近な締結についての告知」（1797）を書き連ねる。カントはそこで，みずからの「理性批判」とその限界づけをふまえない「哲学」はその名に値しないと断言する。それに従うことによってのみ，哲学における「永久平和条約」は可能と考えたからである。

なおここで批判されているシュロッサーという人物は，ゲーテの義弟である。ゲーテより10才も年長なのだが，妹のコルネーリアと結婚したためである。コルネーリアは5年ほどで病死しているが，ゲーテは終生親しい交わりを続けており，カントとの論争の際もゲーテはカントの主張を支持しながらも，シュロッサーの人間としての誠実さを弁護したりしてシラーにたしなめられている。[21)]

フィヒテは，『コンスタントへの手紙—メースンリィの哲学』（1802～3）という著作を残している。「無神論論争」によって，フィヒテはベルリンに逃れざるを得なくなる。その手助けをしたのがF．シュレーゲルとフリーメースンリィだったという。フィヒテはチューリッヒ時代からこの組織に強い関心を持っており，ワルシャワからの帰途カントらの世話で家庭教師の職を得たダンツイッヒで参入したらしい。イエナに移ってからも，近郊にあった「ギュンター」ロッジに加入している。現在の「バイエルン版」の『フィヒテ全集』刊行の中心になっているラウトによると，フィヒテが「革命論文」などによって「ジャコバン主義者」との風評があるにもかかわらずイエナ大学に採用されたのは，たんにゲーテの推奨があったからだけでなく，「フリーメースンリィ」の支援があったからとの理解もできるようである。[22)]

ベルリンに移ったフィヒテは，旧知のフェスラーを助けて「ロイヤル・ヨーク」ロッジの「哲学による改革」に力をそそぐ。「フリーメースンリィ」を人類教化のための「教育機関」にするのが，２人の一致した願望だったからである。しかしそうした意図を盛り込んだフィヒテの２度の「講演」，ことに「フリーメースンリィ」なり「フリーメースン」を人類教化の上で特別のものと見ることに否定的なフィヒテの主張は，まさにそこにプライドの拠り所を求めていた古くからのメンバーの怒りを買うことになる。それを調停しようとしたフェスラーとも争い，フィヒテはわずか３ヶ月ほどでこのロッジを去ることになる。

しかしメンバーのすべてがフィヒテの主張に批判的だったわけではなく，その講演は『ロイヤル・ヨーク叢書』として２冊に分けて出版される。その詳細は省くが，「フリーメースンリィ」の歴史・目的・思想的立場などについて明確に示しており，直接この組織について述べたものとしてはレッシングの『エルンストとファルク』と並ぶ貴重な文献である。

なおフィヒテはこのような形で慌ただしくロッジを去っているが，終生みずからを「真のフリーメースン」と考えていたらしい。しかしレッシングも『エルンストとファルク』の後半で描いているとおり，現実のロッジのありようはそうした「理念」とはほど遠いものだった。だからこそ，「フリーメースンリィ」は「理想化」されなければならなかったのである。それはレッシングにとってばかりでなく，ヘルダーでもフィヒテでも同様だった。そして『遍歴時代』における「塔の結社」の変質も，ゲーテなりの「秘儀結社」なり「フリーメースンリィ」の実態理解をふまえた，「理想化」の一つの形態だったのではなかろうか。以上の背景をふまえながら，本題に入ることにしよう。この時代になぜ「秘儀結社」が横行したのかという背景については，その中でふれてゆくことにする。

三　「塔の結社」とは

１．『徒弟時代』における「塔の結社」

1794年から96年にかけて書かれたという『徒弟時代』は，77年から86年にわたる『ヴィルヘルム・マイスターの演劇的使命』第１部６巻を下敷きにしているという。後者では表題が示すとおり，「演劇人」としての完成をめざすヴィルヘルムが，人形芝居から芸術的劇団などあらゆる舞台芸術あるいは芸をとおしてみずからを錬磨してゆく過程が描かれている。しかし前者ではヴィルヘルムは途中から演劇を離れ，より広い人間としての完成を求めるようになる。こうしたヴィルヘルムの転換の一つの契機となっているのが，ほかでもないゲーテによる作品への「塔の結社」の導入である。

この「結社」の存在は，第７巻９章においてヤルノーによって参入の儀式に導かれるまでは，ヴィルヘルムにも判らない。早朝ヴィルヘルムはロタリオの城のたくさんの部屋や廊下を通って，これまでどう探しても見出せなかった古い塔の入口に至る。暗闇をくぐり抜けて入った礼拝堂のような部屋では，ヴィルヘルムがこれまで大事な節目に出会ってきた「見知らぬ男」や「牧

師」「士官」，さらには父の「幽霊」までが登場する。彼らはすべて，陰からヴィルヘルムを導いてきた「塔の結社」のメンバーだったのである。[23] 彼らはヴィルヘルムがすでに「迷い」を脱し，必要な「教養」を身につけて目的の地に向かっていることの確認を与え，最後に現れた友人の司祭つまりアベがヴィルヘルムに「修了証書」を手渡す。ヤルノーが前夜ヴィルヘルムを仲間として認め，自分たちの「小さな世界」つまり秘密の団体の中で行動するようにと語ったのはこのことだったのである。そこでフェリックスはわが子かどうかというヴィルヘルムの問いをきっぱりと肯定した司祭は，子どもをヴィルヘルムの胸に抱かせて叫ぶ。「若者よ，おめでとう。君の徒弟時代は済んだ。自然が君を解き放ったのだ」と。[24]

もちろんここでの「自然」とは「神」のことだろうが，受動的に読み替えれば「自然から解き放たれた」ことになる。いわば生まれながらのものに縛られていた状態から自由になり，みずからの意志に従って生きることが可能になったのである。まさに「徒弟」としてのヴィルヘルムはそこでの修業を終え，一人の人生の「職人」としてつまり「塔の結社」の一員として新たな修業へと旅立つことになるのである。

しかし一時の興奮が醒めてみると，こうした「結社」への参入はヴィルヘルムにとってもさほど納得のいくものではなかった。「結社」にテレーゼとの結婚を妨げられ「結社」自体にも疑問を感じていらだつヴィルヘルムに，当のヤルノーがつぶやく。「君が塔の中で見たものはみな，もともと若い頃にやったことの遺物でしかない。初めは大ていの仲間が大まじめに取り組んだのだけれど，今はみな時たま微笑みを送るくらいなのだ」。[25] カントの「かつてはフリーメースンリィは，いろいろのことをした。今はきっと，気晴らしとお遊びでしかないのだろう」という評とまったく同じである。これをどう理解したらよいのだろう。ここにはみずからの体験をもふまえた，ゲーテ自身の「秘儀結社」の実情への批判がふくまれているのではなかろうか。

ヴィルヘルムは，「ではあなた方は，ああしたものものしい符牒や言葉でお遊びをしているだけなのか」と怒る。そうしたヴィルヘルムを前にヤルノーは，嫌がるヴィルヘルムを制して彼の「修了証書」に解説を加える。この「証書」の前半は，ヴィルヘルムのこれまでの演劇をとおしての芸術活動の批判である。ヤルノーは以前，自分に即してしか演技できないヴィルヘルムには役者としての才能がないと決めつけた。「証書」に書かれているのも，そうしたみずからの枠でしか「芸術」を見れないことへの批判であり，より広い見地からの理解の必要性である。ヤルノーはそこは省いて，後半のこれからのヴィルヘルムの生き方を描いた部分を取り上げる。

ここで興味深いのはヤルノーが率直に，自分と司祭つまりアベとの「結社」内での「教育」や「人間形成」理解の差異を述べている点である。ヴィルヘルムの役者としての資質批判にもみられるとおり，ヤルノーは徹底した合理主義者であり，誤りを誤りとして指摘し正させることが「教育」だと考えている。しかしそうした高踏的態度は他人を退け，みずからにはうぬぼれを生むことになった。そこに現れたアベは人間をあるがままにみつめ，それぞれがみずからの資質に気づき，それに即した役割を担って行くことの手助けをするところに「結社」の意味を見出そう

とする。まさに人を，「努力するからこそ迷う」ものとしてとらえようとするのである。ヤルノーは芝居がかった参入の儀式を好まないが，アベはことに若者の神秘や秘密への欲求に応ずることも必要な手立てとして，これを重視する。そうすることで「内にたくさんの展開すべきものを持っている人間」の眼を自分にだけでなく世界にも開かせ，秀れた感受性を守り育てると同時に，内に止まる事のない行動性をも身に付けさせようとするのである。[26)]

ここで注目したいのは，「塔の結社」の人格形成の目標として「行動」「行為」が強調されている点である。それは『ファウスト』の「初めに行為ありき」に象徴されるような，たんに「教養」理解を静的なものから動的なものにすることをめざしているだけではない。菊池氏も強調するとおり，「結社」の一員となることはみずからの資質を生かしてみずからの「器官」を磨き，その組織の一つの「器官」として具体的な任務を担えるような力を身につけることをも意味する。[27)] ヴィルヘルムは，外科医的な知識を学ぶことでその役割を果たすことになる。もう一つ抑えておきたいのは，これが後のアメリカ移住などにみられる「結社」自体の変質の伏線ともなっていることである。それは，ゲーテ自身の中での「初めに行為ありき」の変質過程と見てもよかろう。

その点でもう一つ注意したいのは，ヤルノーの「塔の結社」の長としてのロタリオ評価である。ヤルノーは，この人の中ではいかに達識と行動が切り離しがたく一つになっており，しかも常に発展し広がりながら一つの世界を形作ることで，人々を勇気づけ巻き込んでゆくかを讃える。そのロタリオがこの本の最後でヴィルヘルムに語る言葉は，『遍歴時代』での「結社」の変質をも暗示して印象的である。

「われわれはいったんこうした不思議な出会いをしたのだから，おたがいにありきたりな生活をするのはよそう。おたがいに手をつないで価値のある活動をしよう。支配したがったりせず，たくさんの人の後見をするつもりで，その人たちがしたがっていることをちょうどよい時にできるよう導いてやり，またたいていはきちんと見てはいるのだが，ただどうやったらそこに行けるかが判らないでいる，そうした人たちを目的にまで連れて行ってあげれるとしたら，ある教養ある人間が自分のため人のために果たせることは，信じれないくらいのものになるのではなかろうか。この点で手をつなごう。これは夢なんかじゃない。りっぱに実現できる，たいていはいつもそうはっきり意識されてきたわけではないが，善良な人々が実現してきたイデーなのだ」。[28)]

2．『遍歴時代』での「塔の結社」

『遍歴時代』の主題はもちろん，「職人」として認められたヴィルヘルムの修業の過程を追うことである。ヴィルヘルムは「塔の結社」と連絡を取りつつ，1ヵ所に3日以上は止まってはならないなどの指示に従いながら「遍歴」の旅を続ける。あくまでこの「結社」がめざすのはより幅広い「人間形成」であり，「一人ひとりが，自分の分に応じてみずからの目的に向かって啓発される」ことだからである。[29)] しかしヴィルヘルムの旅は，二重の制約を持つことになる。その一つは

息子のフェリックスを伴っていることであり，もう一つは時代の推移につれて「塔の結社」自体が変革を迫られていたことである。

ヴィルヘルムは旅に出る前に，「美しい魂」の蘇りともいえる理想の女性ナターリエと結ばれている。ナターリエは直接この後編の中には登場して来ないが，ヴィルヘルムとの手紙のやりとりという形で支えとなってゆく。フェリックスの年令ははっきりしないが，十才前後だろうかまだ幼さを残している。ヴィルヘルムが思い描いたとおりことに親子での山野の旅は，自然や人とのさまざまな出会いを通してのかっこうの「教育」の場となる。フェリックスの新鮮な感性が，思わぬ感動や発見を生み出すことも少なくなかった。しかししょせんは，子どもを伴っての「修業」はそれの求める厳しさを失いがちだった。そうした反省もあってだろう，ヴィルヘルムはレナルドの知人の老人の勧めでフェリックスを「教育州（pädagogische Provinz)」に預けることになる。

「結社」自体の「変質」の問題は，ゲーテ自身の時代理解の推移をふくむだけにかなり複雑である。『遍歴時代』は，一度1821年にまとめられている。それが現在見られるような形になるまでに，7，8年の反省が込められているのである。マクス・ヴントによると1829年版の最大の改定は，主題が「遍歴」から「移住」に変わったところにあるという。[30] それに伴って作品の中心は，ヴィルヘルムよりもレナルドに移ってゆく。

もともと「移住」の問題は，『遍歴時代』で初めて出てくるわけではない。すでに『徒弟時代』の第8巻第7章で，ヤルノーはアメリカに渡る計画があることをヴィルヘルムに話している。フランスをはじめあちこちの国で「大きな変化」が生じ，財産の安全性が急激に減ってきた。それに対応するためには「結社」も世界に分散せねばならず，そうすることで困難が生じた場合にたがいに支え合う体制を作っておく必要があるというのである。しかしそこで強調されるのは，厳しい状況を乗り切るという消極的な面ばかりではなかった。「塔の結社」自体の世界的な広がり，つまり「世界同盟（Weltbund)」にも通ずる「世界結社」への変質をも意味する。つまり「われわれの古い塔から一つの結社が生れなければならない（aus unserm alten Thurm soll eine Societät ausgehen)」のである。[31] それをめざしてヤルノーは，以前にロタリオがアメリカに残してきた土地の活用を図り，司祭はロシアに新境地を開こうとする。しかし国内の基盤をなくすわけにはいかないので，ロタリオはドイツに残る道を模索する。アメリカ行きは少数だが実行されたが，『徒弟時代』の段階ではまだあまり成功しなかったようである。この計画が軌道に乗りまさに「結社」の最大の使命としてめざされるのは，『遍歴時代』でレナルドがその推進者として登場してからのことである。

作品ではレナルドは，ヴィルヘルムとの交友から「結社」に近づくことになっている。その背景となるのが，大地主の子である彼の遊学の費用が，小作人の未納金の取り立てでまかなわれたことである。その小作人の娘のナホディーネに助けてくれるよう懇願されたレナルドは，結局はそれを果たせずに旅に出てしまう。この娘と父の行方を探してくれと頼まれたヴィルヘルムは，

山あいの地で織物工場を切り盛りしているナホディーネを見つける。レナルドは後にそこを訪ね，機械の侵入によって危機にさらされる農村手工業の実態を学びとることになる。これらの経過を述べた諸章のうち，ナホディーネとの出会いを描いた第1巻第11章の「栗色の娘」は21年版からのものである。それに対して織物業の実態を綴った第3巻第5章の「レナルドの日記」および第13章のその「続き」は，29年版で初めて現れる。このことはペスタロッツィやフーリエ，オーエンなどのユートピア社会主義などの影響などもふくめて，ゲーテの思想的推移を見る上で重要な課題となろう。

それらの体験を経てレナルドも「塔の結社」の一員となり，もともとの強い「技術」への関心と知識を生かして建築などの技能者の「バント（Band)」つまりリーダーとなり，[32]伯父のアメリカでの資産を生かして「移住」を推し進めることになる。その内実を示すのが第3巻第9章の「レナルドの演説」であるが，これは21年版のをそのまま用いているようである。ということはそれは，『徒弟時代』での構想と具体的「移住」実行との中間をなすものと見ることもできるし，後者を先取りしたものと見ることもできよう。

菊地氏は，『遍歴時代』での「変質」を示すもう一人の重要人物としてオドアルトを挙げている。[33]第3巻第12章の演説がその中心であるが，この人は国内に残って果たすべき義務があることを強調する。これまで閉鎖的に扱われてきた貴族などの領地がまだまだ手つかずのままに放置されており，活用の余地があるというのである。もちろんそのためには領主の理解と彼らへの一定の利益の提供が前提となるが，それを解決できれば敵国とも国境を越えた経済交流が可能となる。小規模だが，今のEUに似た構想になるのだろう。アメリカ移住に代表される「外への植民」に対してこうした「内への植民」の提起も，身近な所に「世界同盟」への一つの基盤を見出そうとする一つの試みといえよう。このオドアルトの提起も，もちろん29年版に初めて見られる構想である。

このように『遍歴時代』自体の中でも，完成に行き着くまでにかなりの曲折を経ている。何が，すでに70才を越えたゲーテを改作へと駆り立てたのだろう。その検討に入る前に，大まかにでも「塔の結社」の位置づけについての諸家の解釈を見ておこう。

3．「塔の結社」の位置づけについての諸解釈

「塔の結社」ことに『徒弟時代』でのその重視には，シラーの「異議」が大きく投影しているという。ゲーテに草稿を見せられたシラーは，この「結社」の構想を前面に出すことを勧め，時には登場人物の内的描写にこだわるゲーテと争いもしたようである。ゲーテは最後の第8巻の草稿は見せなかったらしく，シラーの忠告どおりにできなかったのは2人の性格の違いによると弁明している。[34]その是非はともかく，第7巻以降『遍歴時代』のすべてにわたって，この「結社」が作品をリードして行くことになる。

その役割を積極的に評価するのは，「『ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代』論」（1936）の

ルカーチである。[35] ルカーチはこの作品を，どのようにすれば市民社会の中で個々人はみずからの人間性を完成できるかの一つの実験と考える。そうした理解に立ってルカーチは，「塔の結社」を「孤島」と呼んでいる。それは「社会の中の社会」，つまり一般の社会から隔てられた小社会として設定されているからである。その意味は何よりも，この集団が市民社会で活動する働く人々によって構成されていることにある。メンバー個々人の人間としての発展を通して，市民社会全体の変化が的確に描写されているとみるからである。ルカーチは「社会主義リアリズム」の理想を，「精神と魂の重要な発展を静かな調和とそれでいて強烈な感覚的な印象をもって描き上げること」に求めている。ルカーチはそのような意味で，この「結社」の表現にもゲーテのリアリスティッシュな感性の現れをみようとするのである。もちろんルカーチは，この「結社」を「やや逃避的」とも「非現実的」とも見ている。そうした限界は持ちながらもこの「結社」は，フランス革命が呼び覚ました人類改革の希望のきざしを，生活の中での実践として描き出したものととらえられるのである。ルカーチには『遍歴時代』の評はないようだが，『徒弟時代』の範囲でも「稔りなきロマン主義」を克服する十分な示唆がみられると考えている。ロタリオやナタリエをも貴族主義的発想を越え出た人とするなどややむりな解釈も見られるが，「塔の結社」を徹底して前向きにとらえる一つの典型と言えよう。新島繁氏もこうした見方に近く，木村謹治氏の主張をまとめながらではあるが，「教育州」と「塔の結社」を直接結びつけ，4つの「畏敬」を中心に宗教的情操を養うとともに優れた技術を身に着けさせるその活動を，個人主義の克服，社会中心の生き方の修得と解釈している。[36]

2つの「ヴィルヘルム・マイスター」を「教養小説 (Bildungsroman)」として読むことに対しては，かねてから疑問を持つ人も少なくないようである。[37] もちろん2つの作品を通してヴィルヘルムは「自己形成」なり「人間形成」に努める。しかし結果的には主人公は，さまざまな経験は積んでも確信を持って行動できるようにはならない。そのため「結社」の一員になってもいつまでも無力感や絶望感を捨て切れず，人格的完成を達成できずにいると見るのである。登張正実氏はこうした主張に反対しこの2つの作品の「教養小説」としての意味を振り返る中で，この「結社」の役割を「解きがたい生の秘儀」をBildungの過程を通して解き明かした点に求めている。[38]

もちろんこの「結社」の肯定的意義をもっとも詳細に論じているのは，『ゲーテの世界』での菊池栄一氏である。氏はその第二篇「精神の世界」で，フリーメースンリィそのものの由来やレッシングやヘルダー，さらにはフランス革命との関連など幅広い視点から，ゲーテがこの「結社」を取り上げた意味を論じている。ただまだ「秘儀結社」などについての研究が進んでいなかったためか外堀を埋めるのに急で，作品におけるその位置についてはあまり詳しくはふれていない。注目したいのは若い頃からゲーテがフリーメースンリィを，「『上から下へ』向かってしかけられた，一種の変態的な解放運動」と見ていたという指摘である。[39] みずからの力の限界を自覚した貴族階級が，新興の市民階級と結びつこうとして起した妥協あるいは懐柔の策として理解しよう

とするのである。他の地域よりは自由都市的気風の強かったフランクフルト・アム・マインではそうした流れを予感させるものがあったのかもしれないが，ゲーテ自身がまもなくヴァイマル宮廷に入り終生そこを離れることがなかったことからみても，ドイツ全体にわたる傾向とみることはできまい。逆に「結社」の現実がそうであればこそ，ゲーテが作品中の「塔の結社」により民主的な人間の結びつきを求めたと見れないこともなかろう。作品にそった菊池氏の分析で目立つのは，ことに個々のメンバーが「結社」のOrganとなることの意味が説かれていることと，「世界同盟」という思想との関連から「アメリカ移住」の意義が検討されていることくらいである。氏の「社会背景」の分析については，後にふれたい。

次に否定的解釈だが，ビルショフスキーは『徒弟時代』でのこの「結社」の発想を，「作者の気まぐれ」とか「博愛主義にもとづく秘密結社とその決まり文句や階級に対する時代の好尚」の所産と突っぱねている。[40] ゲーテは，「善良な迷える人々を導くためにこの種の秘密結社を組織」したと言うのである。もっとも『遍歴時代』の方は，「人間存在とその目標，危難について語られたもののうちでもっとも深遠な作品」とされ，そこでの「結社」の役割を産業革命のあおりへの対応として一定の評価を与えている。ことにBandという言葉をリーダーと組織自体の名の二面から理解し，Bandの一員となること，つまり「諦念の人々」の一人となることの意味を，ゲーテの行為重視と他人との調和という観点から理解し直していることは注目してよかろう。[41] なおモームも「塔の結社」を，「多分に子どもだましの印象が強い」と述べている。[42]

清水純夫氏は「塔の結社」を，封建的・貴族的な特権を維持しながら徹底した合理主義によって資本主義の浸透への対応をめざす集団とみなす。[43] ロタリオが考えている改革はみずからの貴族としての優位を前提にしたものであり，その妹のナタリエの教育への取組みも，しょせんは自分たちに役立つ労働者作りをめざすものにすぎないと考えるのである。「結社」の社会変動への対応のみに目を向けたかなり偏った理解だが，その根源はこの「結社」が竪琴弾きの老人やミニョンを，運命や魂など非合理なものにこだわり何の社会性も持たない人間として冷たく切り捨てることへの不満にあるようである。それがヴィルヘルムの努力を稔りないものにし，そうしたはざまに神秘的な内面世界の賛美を生み出したとみるのである。

こうした「結社」の持つ合理性と，運命にもてあそばれている人間の非合理性との相剋をゲーテはどのように理解していたのだろう。この問題を考える上で，もっとも役立つのは柴田翔氏の解釈である。[44] 柴田氏は，Bildungを「個としての形成」と「組織・共同体の中での形成」の2つの層からとらえる。「結社」の助力を得てのbildenをも「人間形成」の一つのあり方とした上で，2つの「マイスター」を一貫した「教養小説」としてとらえ，そこでの「塔の結社」の役割と意味を明らかにしようとするのである。その際柴田氏は，「ヴィルヘルム・マイスター」自体の形成と構造を「現実空間」と「理念空間」という視点から見直す。まず『徒弟時代』の先駆をなす『演劇的使命』を，国民劇場によるドイツ国民への働きかけというレッシングにもつながるような，「使命」をめざす「現実空間」と考える。『徒弟時代』の前半の第5巻までは，この試作をふ

まえた「現実空間」とみなされる。ここでは言うまでもなく,「個としての形成」が中心になる。

第6巻の「美しい魂の告白」を橋渡しとして,第7巻・第8巻からは「理念空間」へと移行する。もちろんその「理念」の支えとなるのが,「塔の結社」である。『遍歴時代』も同様で,ヴィルヘルムはその「理念」に導かれ,反発したり共鳴したりしながらその組織を通じての自己陶冶に励むことになる。このように柴田氏は『演劇的使命』から2つの「マイスター」への移行を,「使命」から「修業」への移行ととらえる。その上で後者での「修業」を,個人としての取組みと組織の一員としての取組みという2面からとらえることで,一貫性を持たせようとするのである。ここで注目されるのが,2つの「マイスター」での「理念空間」の主体としての「塔の結社」の役割の変化である。『徒弟時代』では「結社」は,あくまで個人としてのみずからの錬磨をめざすヴィルヘルムの助力者である。その点ではまさに『徒弟時代』は,典型的な「教養小説」と言えよう。

『遍歴時代』になっても,もちろん「結社」のこうした役割はなくなるわけではなく,人間形成の導き手ではあり続ける。しかし「結社」もその一員となったヴィルヘルムも,アメリカの独立やフランス革命,さらには産業革命の生み出す激しい社会変動への対応を迫られる。『遍歴時代』には,die Entsagendenという変わった副題が付いている。「諦念のひとびと」などと訳されることが多いようだが,柴田氏なども指摘しているとおり,「諦念」より「断念」の方がふさわしいようである。[45] ここでいうentsagenとは,俗世での個人としての妄念を断ち,全体の中でみずからの理想に生きることを意味するからである。いわば「個としての形成」を打切り,「組織の中での形成」に徹することなのである。[46] その点では「諦念のひとびと」という言葉がふさわしいのはミニヨンことにハープ弾きの老人であって,「結社」のメンバーには当てはまらないように思える。柴田氏はこのような点もふまえて,『遍歴時代』の「社会小説」的な性格を強調する。

ここまではよく納得できるのだが,やや理解しにくいのは「塔の結社」の「明確さ」と「暗部」からの分析である。「明確さ」とは「結社」の表に現れた姿であり,「透明な光と生に充ちた空間」とも言われているようにその姿は一つの理念を指し示している。しかしそれは人間の「理想」の表現であるだけに,抽象的であり「空疎な明快さ」を伴う。柴田氏はことにそのリーダーたちに,みずからを絶対視する者の傲慢さとうそ寒さを感じ取る。いわば彼らは,絶対者としての神の目でものを見ていると言うのである。しかしそうした彼らも一度ふり返ってみれば,一人の弱い人間にすぎない。彼らも死を恐れ,運命にもてあそばれざるを得ない。そこに柴田氏は「暗部」,つまり「表層に隠された秘密」を見ようとするのである。氏が作品における「結社」の意味を認めながらも,竪琴弾きの老人やミニオン,さらには人間の無力と天国での救いを説く「マカーリエ現象」をも評価するのはそのためである。氏はこの「現象」をゲーテ自身の「老い」への恐怖とも結びつけているが,とくにものごとを一元的に割り切ることのできないゲーテの世界観なり人間観の深さの現れとも理解する。同じ晩年の作でありながら,ゲーテが『遍歴時代』では人間が社会の中でどう生きるかを主題とし,『ファウスト第2部』ではあくまで個人とし

ての完成にこだわったのもそのためと見るのである。[47)]

確かに一つの見方ではあるのだろうが，こうした「結社」の「暗部」の理解には飛躍があるように思える。ここで言われている「暗部」とは組織にかかわることなのだろうから，いきなり私的な「死への恐怖」などと結びつけるのではなく，まず「秘儀結社」そのものの性格やそれの持つ「秘密」の内実などからの分析が必要なのではなかろうか。「塔の結社」はあくまで一つの「秘儀結社」である。フリーメースンリィもそうだが，これらの「結社」は表向きはオープンのように見せかけながら，それなりの「秘密」なり「秘儀」を重んずる。神秘めかしたヴィルヘルムの塔での修了式の過程などはその典型的現れだろう。第2に柴田氏もくり返しているとおり，この「結社」においてもその「理想」は抽象的であいまいである。そして「理想」がそうした性格を伴うだけに，常に現実との齟齬を来たさざるを得ない。したがって「暗部」としてまず指摘されなければならないのは，こうした「結社」自体の持つ基本性格である。ゲーテ自身「結社」とすっきり一体化できないのも，こうした危惧を捨て切れないからだろう。その上に立って，彼らが「理想」として求めている「秘密」と私的な「秘密」との相克をとらえるべきだろう。もちろん「結社」の個々人がこうした「暗さ」に付きまとわれることはあろう。しかしそれはあくまで私的なことであって，「結社」という組織に伴うことではない。おそらく柴田氏は強制的な組織にありがちな個人とのジレンマに「暗部」を見ようとしているのだろうが，やや文学的にすぎる解釈のように思える。

それはともかく私自身の関心からしても，当時の「秘儀結社」がどれだけ人々の思想なり人間形成に役立ち得たのかは重要なテーマの一つである。その点では2つの「ヴィルヘルム・マイスター」は，当時のもっとも優れた知性が残してくれた貴重な証言と見ることができよう。そうした点からしても，柴田氏の2つの「マイスター」理解と「塔の結社」の位置づけは多くの示唆をふくんでいるように思える。

四.「変質」を強いたもの

1．社会背景の変化

では「塔の結社」は，どのようにして「変質」を遂げてゆくのだろう。紙数も尽きてきたので，デッサンだけでもしておこう。

作品では「移住」重視の契機は，ナホディーネとレナルドのかかわりを軸として説かれてゆく。今はズザンネ夫人として亡き夫の後を継ぐナホディーネは，迫りくる家内工業の危機の中で思い悩む。工場を建て直すには，新しいより効率のよい機械への切替えが必要である。その資金もないわけではないが，そうすることはこれまで身近で自分を支えてくれた多くの人々を切り捨てることである。いわば彼女自身が貧しい者のパンを奪う抑圧者になるのである。そうしたとき，レナルドはアメリカへの移住を勧める。小作地を追われた自分たち親子が，心ならずも「遍歴」を重ね辛うじて新天地を切り開いたように，貧しい人々と手をたずさえて海の彼方に新たな

運命を求めるのがよいのだろうか。その地で本当に生活を支えて行くことができるのか，ナホディーネは悩みに悩む。

菊池氏は，こうした農村での窮状がドイツ全体にまで広まった背景を4つの点から説明している。[48]一つは，不動産から動産への価値の転換である。もちろん産業革命の進展による，農業中心から工業中心への移行がそれを促進する。第2は人口の過剰であり，第3はフランス革命・ナポレオン戦争による社会機構の変革である。先にふれたとおり菊池氏はゲーテの若い頃からの実感として，貴族ことにその下の層と市民階級の対立を「上から下へ」の移行と理解していたことを強調している。そうした流れが，動乱の中でさらに促進されていったということだろう。第4はそれにつながるが，フランス本土からの亡命者の氾濫である。3，4を通じてたんなる人口の移動としてではなく，さまざまな民族が入り混じっていく点が重視されている。

もちろんこのような整理も可能だろうが，基本をなすのは産業革命の浸透とフランス革命・ナポレオン戦争による混迷だろう。いわばそれらを通じて，従来の価値基準が大きな転換を余儀なくされたということである。大は国家の枠組みや社会秩序から民族間・階層間の差別意識，小は家を追われた者がどこで生活の糧を得るかまで，そのあおりは少なくなかった。ことに1806年に9世紀にもわたる「神聖ローマ帝国」という枠を失ったドイツ圏の住民は，強い未来への不安を抱いていたことだろう。そうした中で小国とはいえ，一国の政治の中枢にあったゲーテがその将来をどう見定めるかは深刻な課題であったにちがいない。以下さらに，今後の研究の指針を示しておこう。

2.「フリーメースンリィの理想化」とのかかわり

まず注目したいのは，「移住」の重視がたんに住民の新たな生活の保証や「結社」の世界的な規模での相互支援体制作りにあるばかりでなく，「世界同盟」的な構想を背景にしていることである。ドイツ圏でカントをはじめ多くの人々が「世界市民」的な発想を重んじたのは，ドイツ圏の小国分立の弊を越え出ようとのあがきでもあった。そしてそれが，「フリーメースンリィ」などの「結社」を横行させる一つの要因ともなった。

そうした点から考えてみたいのは，「フリーメースンリィの理想化」のゲーテへの投影の問題である。もともと「フリーメースンリィ」思想は，イギリスでの信仰をめぐる争いの解消を契機とするものだけに，宗教上の「寛容」を柱として出発した。そこからより広い意味での「寛容」，つまり民族や階級間の格差やそこから生ずる対立の克服がめざされることになる。それが「人間としての自由・平等」であり，「世界市民主義」である。この「自由・平等」が現実的要求と結びつくと，とうぜん政治的意味を持ってくる。最近のアナール派などの研究から見ても，フランス革命が組織としての「フリーメースンリィ」の主導によるということはないようだが，その中心人物のほとんどが「フリーメースン」思想の持主だったことは事実のようである。[49] フランスではさらに革命の進展につれて「自由」以上に「平等」が前面に出てくるにつれ，「フリーメースン

リィ」内部でも急進派と穏健派の対立が際立ってくる。その中から「大東社」のような政治結社に近い一派も生まれ，パリ・コンミューンなどをリードすることにもなる。　しかしこれまでも述べてきたとおり，ドイツ圏では「フリーメースンリィ」は多分に上流階級を中心とする社交クラブ的性格が強かった。初期のイギリスでは，「真理・救済・兄弟愛」が組織員のモットーとされてきた。「真理」とはもちろん「フリーメースン」的な宇宙・世界観に立つものだが，後の２つには多分に「石工」のギルド時代の「助け合い」の精神が残されている。ところがドイツ圏では，「叡智・強さ・美しさ」の方が重視されている。「叡智」を追い求め，それを道徳的な「強さ」と「美しさ」への感性によって守り育てるというのがその意味である。このモットーは1723年に制定され，その後の世界の「フリーメースンリィ」活動の柱ともなっている「アンダースン憲章」にも見られるもので，別にドイツ圏独自のものというわけではない。しかしこの「真・善・美」につながるやや哲学的な言葉の方がドイツ人にはピンとくるのだろう。前世紀の各地の「フリーメースンリィ」の会報などでもくり返し活用されている。ところが興味深いのは，こうした伝統に反してゲーテが「塔の結社」の「移住」重視への「変質」に際して，もともとの「フリーメースンリィ」の「救済・兄弟愛」に近い「結社」理解を示していることである。このことは，どう理解したらよいのだろう。

もちろん問題は何をモットーにするかにあるのではなく，それがどのように生かされていたかにある。ドイツ圏では「秘儀結社」は，ゲーテをふくめメンバーの自尊心や利害の支えとなることが多かったことはこれまでもふれてきた。しかしその現状は，けっしてその歴史や基本理念に即したものではなかった。それがレッシングやヘルダー，フィヒテらを現実のロッジから遠ざけた。ゲーテについても同様だろう。まさにその現状は，神秘めかした「お遊び」に近い面を持っていたのである。しかしレッシングらは，みずからの信念としてはこの思想なり精神を捨てようとしなかった。フィヒテの自分こそは「真のフリーメースン」との確信は，他の人々のものでもあったのである。「フリーメースンリィ」が「理想化」されなければならなかったのは，そのためである。

その点で見過ごしてならないのは，レッシングらとゲーテとの相違である。レッシングらはあくまで「フリーメースンリィ」の問題をドイツという枠内で考えている。フィヒテは恐怖政治にかかる1973年初めに『フランス革命についての公衆の判断を正すための寄与』を記し，「革命」を「譲り渡せない権利」として擁護したことで「ジャコバン主義者」と評された。そのフィヒテでさえ，ナポレオンの攻撃の前ではみずからも銃を取ることを望む「愛国者」に立ち帰らざるを得なかった。もちろん生涯「真のフリーメースン」たろうとしたフィヒテに，「世界市民」的視点がなかったはずはない。まず自国の，自国民の変革からというのがフィヒテの意図だったのだろう。したがってフィヒテのロッジ改革の試みも，とうぜんドイツ人の「頭の革命」に立ち向かうことになる。

しかしゲーテは，「塔の結社」を国内に閉じ込めることはできなかった。ゲーテはみずからの

「現実的性癖」を強調しているが,[50]けっしていわゆる「現実主義者」ではなかった。ゲーテはやはり遅れたドイツ圏に生きる一人として,同時に「理想」を求めずにはおれない人でもあった。いわばゲーテは,「現実的な理想主義者」だったのである。産業革命の浸透という現実に,ゲーテはその鋭い「リアリスト」としての眼をそそぐ。おそらく作家・詩人であるとともに,財政的再建にも奔走したヴァイマルの政治担当者としての体験がこうした眼の背景となっているのだろう。しかし同時にゲーテは,思想なり信念による世界変革を夢見る「イデアリスト」でもあった。しかしその一つの試みとしてのアメリカ移住は,けっして明るい展望のみを持つような甘い「夢」ではない。菊池氏も指摘しているとおりゲーテが移住後の状況を作品の中に描こうとしなかったのは,その「リアル」な眼がそうさせたのかもしれない。[51]しかしともかくゲーテは,「塔の結社」をたんなる精神的な「修養結社」から世界的な視野をも持った「移住結社」へと変質させた。おそらくゲーテはまるで意識していなかったろうが,そうするには「結社」のモットーをドイツの伝統につながる「教養」重視的なものに止めることはできなかった。ゲーテはまさに産業革命の浸透を直視する中で,その発祥の地であるイギリスの「フリーメースンリィ」の「救済」と「兄弟愛」を重んずる立場に立ち帰ることになるのである。その過程でもちろん「教養」なり「人間形成」理解も,個人に止まる地平から社会なり時代への対応をも求めるものへと姿を変えてゆく。「行為」「行動」もそうである。ファウスト的な生きることの意味を求めての知的なあがきは,『遍歴時代』においては少なくともいかにして「結社」の仲間とともに生き,それをふまえて理想を実現するかという姿勢へと移行してゆく。「君の生を行為に次ぐ行為」としてまっとうさせてくれるのが,まさに「塔の結社」とされるのである。[52]ゲーテのこうした「変質」の意味を,さらに作品理解の上からも社会背景や交友などその他の資料の面からもどう深めてゆくか。それが今後の課題である。

注

1) Kants gesammelte Schriften. Hrsg. von der Königlich-Preußischen Akademie der Wissenenschaften, Bd. IX, Berlin, 1923, S.25 und Bd. 11, S.429.

2) Stewart, D. : Account of the Life and Writings of Adam Smith, LL.D., in the Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith, vol. 3, Indianapolis, 1928, p.274 f.

3) 隅谷三喜男「思想の言葉」,『思想』(岩波書店),1973年12号,74～5ページ。

4) 田村一郎『十八世紀ドイツ思想と「秘儀結社」』(多賀出版,1994年)。

5) P. ネットゥル『モーツァルトとフリーメースン結社』(音楽の友社,1981年),K. トムソン『モーツァルトとフリーメースン』(法政大学出版会,1983年)など参照。

6) E. Lennhof／O. Posner : Internationales Freimaurer-Lexikon, Wien／München, 1932, S. 616～619.

7) Goethes Werke, hrg. in Aufrage der Großherzogin Sophis von Sachsen, Weimar, 1887～1919, Abtheilung I, Bd. 28, S. 135 ff.

8) 玉林憲義『若きゲーテ研究』(創文社,1974年),194～5ページ。

9) 田村前掲書,32～3ページ

10) Lessings Werke, Vollständige Ausgabe in fünfundzwanzig Teilen, Hildesheim／New York, 1970, 6. Teil, S. 56 f.

11) 菊池栄一『ゲーテの世界』(東京大学出版会，1953年)，153ページ。
12) Goethe Werke, Abtheilung I, Bd. 29, S.65f. 菊池前掲書，153ページ以下参照。
13) 田村前掲書，54ページ以下参照。
14) IFL, S. 616.
15) Goethe Werke, Abtheilung I, Bd. 3, S. 61～70 nud Bd. 7, S. 222 ff.
16) フリーメースンリィの集会では，メンバーは独特の「前掛け」を身に着けるのが慣例になっている。
17) Goethe Werke, Juiläums-Ausgabe in 40 Bde., Stuttgart, 1940, Bd. 8, S. XXV.
18) Goethes Werke, Hamburger Ausgabe in 14 Bänden, München, 1981, Bd. 8, S. 287.
19) Goethe Werke, Abtheilung I, Bd. 33, S. 208 ff.
20) Kants gesammelte Schriften, Bd. 10, S. 371 f.
21) Goethe Werke, Abtheilung IV, Bd. 11, S. 140 und Bd. 12, S. 301 f. Schillers Sämtliche Werke. Säkular-Ausgabe in 16 Bänden, Bd. 13, Stuttgart, 1905, S. 53.
22) Vgl. Hammacher, Fichte und Freimaurerei, in Fichte-Studien, Bd. 2, Amsterdam／Atlanta, 1990, S. 138 ff.
23)『徒弟時代』での「塔の結社」にかかわる人物の分析については，義則孝夫：『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』における「塔の結社」について（大阪市立大学『人文研究』20巻－5，1968年）が参考になる。
24) Goethe Werke, Abtheilung I, Bd. 23, S. 127.
25) Ebd., S. 210.
26) Ebd., S. 213.
27) 菊池前掲書，172ページ。
28) Goethe Werke, Abtheilung I, Bd. 23, S. 309 f.
29) Goethe Werke, Abtheilung I, Bd. 25-I, S. 188.
30) Max Wundt: Goethes Wilhelm Meister und die Entwicklung des modernen Lebensideals, 2 Aufl., Berlin／Leipzig, 1932, S. 408 ff., bes., S. 414 ff.
31) Goethe Werke, Abtheilung I, Bd. 23, S. 236 f. ここでは「結社」は Societät とされており，Verein (Bd. 24, s. 10) とか Verbindung (Bd. 25-I, S. 101) と呼ばれることもあるが，ほとんどは Gesellschaft が用いられている。
32) Goethe Werke, Abtheilung I, Bd. 25-I, S. 71 und 223 f.
33) 菊池前掲書，213ページ以下。
34) Goethe Werke, Abtheilung IV, Bd. 11, S. 121. Brief an Goethe, Hamburger Aausgabe in 2 Bänden, Hambung, 1995, S.,
35) Georg Lukács Werke, Bd. 7, Berlin, 1964, S. 69～88.
36) 新島繁「ゲーテの社会思想」，船木重信鑑修民科芸術部論『総合ゲーテ研究』(北隆館，1949年) 所収。
37) 登張正実『ドイツ教養小説の成立』(弘文堂，1964年) 234ページ以下，清水純夫『「ヴィルヘルム・マイスター」研究』(三修社，1996年) 102ページ以下，義則前掲論文，23ページ以下など参照。
38) 登張前掲書，218ページ以下。
39) 菊池前掲書，156ページ以下。
40) アルベルト・ビルショフスキ『ゲーテ　その生涯と作品』(岩波書店，1996年)，706ページ。
41) 同書，1057ページ以下。
42) Maugham, W. S.: Points of View, London, 1958, p.37.
43) 清水前掲書，102ページ以下。
44) 柴田翔『内面世界に映る歴史　ゲーテ時代ドイツ文学史論』(筑摩書房，1986年)。ことに第九章，第十三章および第十五章。
45) 同書，430ページ。
46) ビルショフスキ前掲書，1079ページ。木村謹治『ゲーテ論攷』(伊藤書林，1935年)，185，205～6および237

ページ参照。

47）柴田前掲書，455ページ以下。

48）菊池前掲書，204～5ページ。

49）たとえば Hunt, L.: Politics, Culture, and Class in the French Revolution, Berkeley・Los Angeles・London, 1984, p. 147 f. and 198 ff. 参照。

50）Goethe Werke, Abtheilung IV, Bd. 11, S. 121.

51）菊池前掲書，217ページ以下。

52）Goethe Werke, Abtheilung I, Bd. 25-I, S. 67.

（たむら　いちろう　鳴門教育大学教授　西洋哲学専攻）